

I. 序論:なぜこの「幹」が必要か

- タイトル:

{The Core Logic of Relational Existentialism: An Axiomatic Clarification}

- 目的の明確化:

本資料は、論文「**The Non-Connection Axiom: A Structural Foundation for Relational Existentialism**

」の論理的な核(幹)を、一切の具体例と枝葉を取り除いた公理的構造として提示する。これは、既存の哲学パラダイムとの根本的な相違点を明確にするためのものである。

本稿は、関係実存という概念を可能にする最小構造を定義するものであり、いわば“倫理以前の存在論的形式”の提示である。

II. 核心的な三つの公理(The Three Axioms)

「関係実存論」を支える最もラディカルな三つの公理を、厳密な定義と論理的意義とともに提示します。

公理 I: 非接続性の公理 (The Non-Connection Axiom)

- 定義: 存在{A} と存在{B} は、その全体として直接的に接続することはできない。

- 論理的意義: 伝統的な実存論や倫理学が暗黙の前提としてきた「共感による本質の直接的把握」を構造的に否定する。この公理こそが、議論の出発点における新規性である。

公理 II: 関係実存の糊代性 (The Axiom of Overlap)

- 定義: {A} が {B} に接続する唯一の接点である**関係実存** {B}@{A} は、B が表出させた情報と、A が自身のコードに照らして意味を与えた解釈との**重なり(糊代)**によって成立する。

- 論理的意義: {B}@{A} は、{B} の**内心の真実**を常に無視して成立し、**観測者 {A} の主観**に依存したハイブリッドな実体であることを規定する。

公理 III: 関係実存の独立性 (The Axiom of Existential Autonomy)

- 定義: 関係実存 {B}@{A} は、存在 {B} の手を離れた瞬間、{B} の意図や内心から**完全に独立した「第三の存在」**として一人歩きを始める。

- **論理的意義:**「関係」を、主体間の交換情報ではなく、それ自体で客観的な実体を持つ存在として哲学的に定義する。{A} は、この独立した関係実存に対してのみ倫理的応答を強えられる。

III. 倫理的帰結と独自性 (Novelty and Consequence)

これらの公理が、哲学の最も重要な分野である倫理学と実存論にどのような根本的な変化をもたらすかを結論づけます。

1. 実存論的帰結: 真の孤独:

人間は関係実存としか接続できないため、存在 {B} の真の姿には永遠に到達できないという、構造的な孤独を論理的に基礎づける。

2. 倫理的帰結: シーシュポスの義務:

{A} の倫理的責任は、{B} の内心ではなく、自らが観測し、意味を与えた(しかし B からは独立した)関係実存 {B}@{A} に対してのみ生じる。これは、真実を知り得ないにもかかわらず行動しなければならないという、シーシュポス的な倫理の構造的基礎となる。

3. 結論: 哲学史上の位置づけ:

「関係実存論」は、伝統的な「共感の倫理」を論理的に放棄し、実存論に非接続性の公理という新たな基礎を与える、根本的に新しい枠組みである。